

橋本 順光（大阪大学文学研究科教授）

## はじめに

群盲象を評するという逸話はインドが発祥とされる<sup>1</sup>。まさに象のように巨大なインド亜大陸は、一部の港町や都市がさもインド全体を表すかのように語られてきた<sup>2</sup>。特に船旅が主流であった 19 世紀半ばから 20 世紀半ばの百年間は、目的地までの中継地点にも寄港せざるを得ない。そのため、当初の目的や価値観というものが、船旅で変容し、自然と見聞を広めることになる。その点で、スリランカのコロンボは、シンガポールとならぶ中継港として、かつて多くの人々が必ず立ち寄る場所だった。そのためコロンボは、宗教的にも言語的にもインド亜大陸とはおよそ異なる島国にあるにもかかわらず、インドの代名詞として永く記憶されるにいたった。たとえば、マンゴー・トリックや蛇使いはインドのステレオタイプの一つであるが、これはシンガポールとコロンボのあいだを行き来する船や寄港地でしばしば手品師が行っていたことに由来する<sup>3</sup>。

このように船が燃料や水を補給している間、甲板に手品師だけでなく物売りが押し寄せてくることも珍しくなかった。たとえば、当時、オーストリア領だったポーランドから 1885 年に日本を訪れた画家のユリアン・ファワト (Julian Fałat) が、船のデッキに座る女性船客へ指輪や団扇を売りつけようとするコロンボの風景を水彩画で描いている。その水彩画《コロンボでの船の甲板で》(1885) では、デッキチェアで物憂げに寝そべるヨーロッパからの女性客に、土産物や宝飾品を次々に示して、寝かせようとしないう物売りたちが描かれている<sup>4</sup>。このファワトの水彩画は、生誕 150 周年である 2003 年に、自画像

---

<sup>1</sup> Hajime Nakamura, *A Comparative History of Ideas* (Delhi: Motilal Banarsidass, 1992), p. 219.

<sup>2</sup> はるかに小さい日本も同じく多様な日本像が形成されてきたことは、ウォルター・ウェストンが同じ「七人の男と象」の寓話で説明しているとおりである。Walter Weston, *A Wayfarer in Unfamiliar Japan* (London: Methuen 1925) および邦訳 W・ウェストン『ウェストンの明治見聞記－知られざる日本を旅して』（長岡祥三訳，新人物往来社，1987）の第一章を参照。

<sup>3</sup> 詳しくは橋本順光「インディアン・ロープ・マジック幻想－幸田露伴から手塚治虫まで」，飯倉義之（編著）『怪異を魅せる』（青弓社，2016）を参照。

<sup>4</sup> この絵及び以下の記述については、橋本順光「インドの代名詞コロンボ－デッキパセンジャーとハシム商会」，橋本順光・鈴木禎宏編著『欧州航路の文化誌－寄港地を読み解く』（青弓社，2017）と一部重複している。

を含む3つの代表作とともにポーランドで記念切手が発行された(図1)。ファワトの描く団扇が日本のものを思わせるのは、彼が日本の浮世絵や美術品を積極的に描き、転用したからであろう(図2・図3・図4)<sup>5</sup>。



図1 ファワトの水彩画《コロomboでの船の甲板で》(1885)に基づくポーランドの切手(2003)

図2 ファワト《日本のシャボン玉》(1885)所在不明<sup>6</sup>

図3 ファワトが参照したと思われるオールコック『大君の都』中の「シャボン玉」<sup>7</sup>

図4 葛飾北斎『今様櫛篋雛形』(1823)より。図3の原図は不明だが、おそらく北斎かと思われる。

<sup>5</sup> ファワトのジャポニスムについては、Anna Król, *A Journey to Japan: Japanese Art Inspirations in the Work of Julian Fałat* (Kraków: Muzeum Sztuki i Techniki Japońskiej manggha, 2009)を参照。

<sup>6</sup> Anna Krol, *Japonizm Polski/Polish Japonism* (Kraków: Muzeum Sztuki i Techniki Japońskiej Manggha, 2011), p.120, p.123. 同書でファワトは日本の墓場を描いた点が珍しいと特記されているが、墓場とシャボン玉の組み合わせは、むしろ西洋絵画で伝統的な生のはかなさを描くヴァニタスに連なるものだろう。おそらくファワトは、図3に掲げるオールコックが掲載したシャボン玉の絵から、(オールコック同様に)それがシャボン玉売りとは気づかず、仏教的な無常観を読み取り、それを西洋で受容しやすいよう墓場を書き加えたのではないか。

<sup>7</sup> Rutherford Alcock, *The Capital of the Tycoon: A Narrative of a Three Years' Residence in Japan* (New York, Harper & brothers, 1863), p.299.

コロンボに立ち寄った日本の船客は、ヨーロッパないしブラジルへ向かう途上での寄港だった。前者は、19世紀の後半からこのかたの日本の近代化を象徴する洋行客だった。主に日本郵船の欧州航路を利用し、ヨーロッパで学ぶもしくは働く（そして日本へ成果を持ち帰る）ことを目的とする知識人やホワイトカラーが中心だった。後者は、20世紀初めから盛んとなる海外移民であった。彼らは主に大阪商船を利用し、ブラジルの農園で働くブルーカラーが多かった。この往復で日本人客がよく乗り降りしたので、コロンボの観光業者の中には日本語で話かけ、日本人客を主に対象にしようとするものが現れた。それが1892年に創設された宝石商兼旅行業者のA・K・Hasheemことハシーム商会である。まさにファウトが描いたような光景が、日本の客を相手に日本語で繰り広げられたのが、彼らの残した記録やそれに基づく小説などから想像できる。このコロンボの業者は旅行客との会話だけで日本語を習得し、ついには船会社と提携するほどの信用を勝ち得たのである（図5・図6）。

図5 ハシーム商会の英語広告（中央は1924年に皇太子裕仁親王の結婚祝いに象牙製の象を贈ったことに対する珍田捨巳からの礼状）<sup>8</sup>

図6 これまで利用した顧客を列記したハシーム商会の日本語広告（遺族蔵）

「摂政宮殿下並に各宮殿下其他各閣下、高官諸員の御買上を辱うして居ります」とあり、日本郵船会社社長近藤廉平の名前も見える。

<sup>8</sup> T. Kawata (ed.), *Glimpses of the East: Nippon Yusen Kaisha's Official Guide, 9th Annual Issue 1926/1927* (Tokyo: Nippon Yusen Kaisha, 1927), Burman, Colombo Section, p. 24.

海外への旅が貴重な機会であり、(まだ) 外国語が不得手でほとんど外国を知らない日本人船客にとって、ハシーム商会のスタッフは強烈な印象を与えた。なかでも 20 世紀初めから半ばという、日本の英国との関係が友好から敵対へと変化する時期にあって、「親日的なインド人」として伝説のような逸話が想像され、増幅するようにして流通していた。戦後も 1957 年にはアジア歴訪中の岸信介首相が立ち寄っており、昭和天皇が皇太子時代に立ち寄った店という伝説を強固にしている<sup>9</sup>。翌 1958 年に漁業調査船・照洋丸の船医だった北杜夫もハシーム商会を訪れ、「セイロン。それなら昔、私も行ったことがあります。あそこには確かハシームとかいう宝石店があつて、日本の宮様の写真など飾ってありましたね」という一節を残している<sup>10</sup>。

異国やその名所の印象は、地元の観光業者と彼らが案内するインフラストラクチャーに多くを依存しているが、それらは往々にして旅慣れた風を装いたい旅行客の筆からは抜け落ちてしまう。その一方で、ハシーム商会は巧みな日本語を操るゆえ、過剰なまでに親日的と誤解され、しばしばアジア主義やインド独立運動に共感しているようにみなされた。以下、このコロomboの業者を日本からの客はどのように思い描き、どのような物語が流通していったのか、概観してみることにしたい。

## 1 日本の船客によるハシーム商会の点描―「比較的正直なるが如し」

ファワトの絵でインドの物売りが場違いな日本風の団扇を手にはしているのは、前述したように画家個人の日本趣味なりジャポニスムの現れと考えることができる。その一方

---

<sup>9</sup> 図 5 のような広告や店内の色紙や看板が手伝ってだろう、例えば東恩納寛惇『泰ビルマ印度』(講談社, 1941), p. 232 にあるように、ハシーム商会は「昭和天皇御買上の際御立寄」の宝石店と語り伝えられてきた。戦後も、1963 年 7 月 18 日付『毎日新聞』夕刊の「買いあさる日本人 宝石の国セイロン」には「日本天皇陛下御用達」の看板を出したハシム商会」とあり、児島襄の『天皇』1 巻(文芸春秋, 1974), p. 202 でも、1921 年の欧州訪問途上のコロomboで碇泊中、宝石商が甲板に広げた宝石をみて皇太子裕仁親王は「記念のために買うかな」と買いかけている。ほかにも 1954 年 11 月から 5 年間、駐セイロン日本大使館勤務の夫とともにコロomboに在住した古田喜久恵「セイロン回想録」によれば、「宝石商のハシムさんはダウンタウンで唯一日本語ができる人物でしたので、日頃から日本人旅行者や船員、在留邦人が何かとお世話になっていました」という説明に続けて、「ハシムさんのお店には、皇太子殿下でいらした頃の昭和天皇もお立ち寄りになられたということで、岸総理も立ち寄られました」と付記している。日本スリランカ友の会編著『みんなのスリランカ』(アールイー, 2007), p. 45 を参照。

<sup>10</sup> 北杜夫『マンボウ人間博物館』(文芸春秋, 1982), p. 222. ハシーム商会は、『どくとるマンボウ航海記』(1960)でも日本語に通じる宝石店兼雑貨商として登場する。

で、これはインドから日本までを東洋という枠組みで同一視しているオリエンタリズムととらえることもできよう。ただし、こうした客引きが特に欧米からの観光客に押し寄せる光景が、スエズ運河より東の地域では広く見られる光景として了解されていたことは、少なからず無視できないように思われる。実際、西洋化に邁進していた当時の日本も例外ではなかった。今でも見知らぬ土地の空港や観光名所で安価で安全なタクシーを見つけるためには事前の知識や経験が必要とされるが、19世紀末の日本の条約港では、到着したばかりの西洋の船客がホテルまで人力車に騙されないようにするのは、まずもって不可能だったという。

ラフカディオ・ハーンは、1894年10月11日付の『神戸クロニクル』紙で、西洋人の場合、人力車がおおむね遠回りをするか、法外な料金を請求してくるという問題を取りあげている<sup>11</sup>。居留地周辺の読者層の多くが共有する身近な体験と想像されるが、同時にハーンは、民族的な偏見や分断を回避する賢明な方策を提案している。日本の観光客がそんな目にあわないのは、日本語が分かるという利点だけではないと注記し、これは日本の旅館という制度を利用できるかできないかの違いではないかと、推測したのである。ハーンによれば、事前に宿を予約し、港までの送迎を依頼してからでないともまず日本人は旅にでることがないとまで言い切っており、その制度を西洋人向けのホテルで取り入れてはどうだろうかと提案したのである。

期せずして、こうした制度を取り入れていたのがハシーム商会だった。コロomboには土産物屋兼代理店はほかにもあり、なかには日本人が経営するミカド商会や東郷商会もあったが、もっとも信頼されていたのはハシームとあってよい。図7にあるように、壁には縦書きで「エー・ケー・ハシーム」と日本語の看板があり、港から上陸してすぐ目につく場所にあった。船会社もハシームは別格扱いしており、日本郵船(NYK)などの船客が、コロomboに寄港する前にホテルや観光地まで電報で車を予約できた。1940年のNYKの英文案内によれば、「コロomboでのホテルのご予約は、ハシーム商会まで電報かお手紙で」とある<sup>12</sup>。遺族が保管する観光客案内によれば、もし寄港地での滞在時間が短くなっ

---

<sup>11</sup> Lafcadio Hearn, "The Kurumaya Question", Makoto Sangu (ed.), *Editorials from Kobe Chronicle* (Tokyo: the Hoksueido Press, 1960), pp. 1-7. 邦訳は『ラフカディオ・ハーン著作集』第5巻(恒文社, 1988)を参照。同紙で最初に担当した論説だけに、ハーンは身近な「車屋問題」で開港地にありがちな不信や不満を巧みに導入として取りあげている。一方、1890年に横浜港に降り立って来日した時、ハーン自身は、どこに向かっているのかわからないまま人力車に乗った経験にいたく魅了されている。その経験は、同時期に刊行された『日本の面影』(1894)の冒頭「極東の一日」で活写されている。

<sup>12</sup> T. Kawata (ed.), *Glimpses of the East: Nippon Yusen Kaisha's Official Guide 1940-41 Edition* (Tokyo: Nippon Yusen Kaisha, 1940), p. 14.

て周遊の時間がなくなってしまった場合には、電報料を返金するとまで書いてある。これは気前がよいというより、見返りがあったからにほかなるまい。おそらく返金の際に、店内に客を引き留めて宝石の購買を勧めたのだろう。

例えば作家の野上弥生子は、1938年にコロomboに寄港した際、港に着く前から無線でキャンディまでの車を予約することができたと記している。ちょうど今日のガイド付きツアーがしばしばそうであるように、そのあいだに宝石店での売り込みが挟み込まれるのである<sup>13</sup>。彼女はハシームの店で明治以来の「名士の名刺をトランプのように並べ」られたことを記している(図8)<sup>14</sup>。名刺を渡す際に一筆を頼まれたのだろう、なかには「比較的正直なるが如し」といった評言が記されていたのもあったという<sup>15</sup>。作家の獅子文六が、1922年の「初の船旅」(1963)を回顧して、日本語が堪能な宝石店員が信用できると記した名士の名刺をみせながら勧誘してきたというのもハシーム商会とみて間違いあるまい。慎ましい留学生の獅子と違い、同室の船客は、後に岸信介首相同様に、コロombo名産の猫目石を買ったという<sup>16</sup>。



図7 戦前のコロomboを写した絵葉書 左端に A. K. Hasheem の看板が見える。

図8 「トランプのように並べ」られた名士の名刺の一部(遺族蔵)<sup>17</sup>

<sup>13</sup> 野上弥生子の約三年前の1935年4月、国文学者の久松潜一が「ハシム会社」の車でキャンディへ行った時も、「これからの遠い旅行に、買う気にもなれない」のに、あれを買えこれを買えとうるさく勧められたと記している。久松潜一『国文学徒の思い出』(至文堂、1969), p. 121を参照。

<sup>14</sup> 野上弥生子『欧米の旅』上(岩波書店、2001), p. 87。

<sup>15</sup> 橋本順光「インドの代名詞コロomboデッキパセンジャーとハシーム商会」, 橋本順光・鈴木禎宏編著『欧州航路の文化誌一寄港地を読み解く』(青弓社、2017), p. 128。

<sup>16</sup> 「初の船旅」『獅子文六全集』12巻(朝日新聞社、1969), pp. 463-4。

<sup>17</sup> 上段左から、稲垣平太郎、伊藤博邦、鳩山一郎、緒方竹虎、中段左から大島義昌、長谷川清、大山柏、岩崎小彌太、鳩山春子、下段左から岡崎真一、徳川頼貞、島津久賢、三浦謹之助、根津

こうして毎日のようにコロombo港に降り立つ日本人客の相手をしているうちに、一族や店員は日本語を覚えるようになった。とりわけ息子の M・J・ハシームの日本語は達者で、訪れた洋行客をしばしば驚かせている。彼らはこれまでの日本人客の名刺や彼らが残した日本語の推薦状を見せて、言葉巧みに勧誘を繰り広げ、さらに顧客と名刺の数を増やしていったのだった。

最初期の記録としては、1910年にコロomboを訪れた画家の三宅克己がいる。彼はうるさいながらも、宝石商の根気よさに感心しており、「殊にハセームと云うのは、信用ある商人だと云う日本旅客の証明した名刺を、数枚持って居て、一々これを示して商売する」と『欧州絵行脚』(1911)で記している<sup>18</sup>。なお1910年の日英博覧会の仕事で三宅と同じ船に乗り合わせていた東城鉦太郎(海や船の絵を得意とし、東郷の三笠艦橋の図で知られる)と関安之助(東京帝室博物館嘱託)の一行は、三宅にこんな失敗談を船上で語って談笑したという。彼らはいよいよ寺院見物に夢中になり、船に帰るぎりぎりの時間になってしまうのだが、人力車の運転手に急ぐよう身振り手振りで伝えても、おそらく料金の上乗せを狙ってだろう、わざと悠長にしか走らない。二進も三進もいかに困りはてたところ、ハシームの店員が見つかり、彼に頼んで事なきを得たというのである<sup>19</sup>。

それでは本業である宝石についての評判はどうだったのだろうか。コロomboは特に猫目石ことキャッツアイやムーンストーンなどの宝石の名産で知られ、土産物として当時から人気が高かった。ただ、ちょうどロバート・ブラウニングの『指輪と書物』(1869)や芥川の『藪の中』(1922)のように、船客たちの証言や記録は時に食い違いをみせている。例えば偽物とは記していないが、石ころ同然のものだったと悔しがっているのは1925年にコロomboを訪れた画家の八木彩霞<sup>さいか</sup>である。彼は妻や娘が喜ぶからとついムーンストーンを1ダースほど買ったところ、パリで画家たちに価値のないものと笑われて、みんな「あちらの女に皆くれてやった」という<sup>20</sup>。一方、1923年にジャーナリズム研究の一人者であった小野秀雄は、半信半疑で宝石を買ったところ、ロンドンで鑑定を頼んだら本物だったことを特記している<sup>21</sup>。それこそが巧みな販売戦略だと感心しているのが、1929年に建築家の夫とともにヨーロッパへの途上でコロomboに立ち寄った中條葭江<sup>よしえ</sup>である<sup>22</sup>。たしかに客に後払いが可能であることを念押しし、疑念があるなら買った後でぜひ鑑定して

---

嘉一郎と並べられ、根津の名刺には「セイロン、コロomboニ於ケル愉快なる見学旅行はハシームに負ウトコロ大」という一筆が見える。

<sup>18</sup> 三宅克己『欧州絵行脚』(画報社, 1911), pp. 38-9.

<sup>19</sup> 三宅克己『欧州絵行脚』, pp. 46-7.

<sup>20</sup> 八木彩霞『彩筆を揮て欧亜を縦横に』(文化書房, 1930), p. 123.

<sup>21</sup> 小野秀雄『新聞研究五十年』(毎日新聞社, 1971), p. 157.

<sup>22</sup> 中條葭江『葭の影—中條葭江遺稿』(中條精一郎, 1935), p. 159.

ほしいといえば、客は偽物なら払わずにすむと考えるため、つい多く買ってしまおうことだろう。鑑定に頼んだ場合でも、本物とわかると小野のように感心し、約束通り、後払いの金額を払ってしまうはずだ。それゆえどちらに転んでも損はしないという計算に、「中々隅におけない」と中條は感心したのである。

なおハシム商会は英語話者にも対応していたはずだが、管見の限り、英語圏ではハシムに関する記録は見当たらない。例外的に、ドイツの動物学者であったコンラート・ギュンター(Konrad Guenther)がその旅行記でわずかに言及しているくらいである。彼によれば、ドイツで買えば四倍もする宝石を買えたと記しており、ハシム商会を「高値をふっかけない信用ある」宝石商だとして読者に勧めている<sup>23</sup>。

宝石の真贋についていうなら、一世紀近い営業の長さからいってハシムが贋物の販売や粗悪品を不当な値段で売っていたというのは考えにくい。重要なのは、宝石の質ではなく売りつけることに成功した量であったのではないか。こと日本側の記録をみる限り、言葉巧みに妻や娘へのお土産にと母国語の弁舌に乗せられ、家族恋しさも手伝ってだろう、後払いも可能という手軽さもあり、つい名産のムーンストーンや猫目石を買ってしまったという旅行客は多かったと思われる。おそらく海外という解放感もあって、分不相応に買ってしまった後悔から、あたかも本物を売っていない、あるいは不当に値段が高いという風評が生まれたのではないだろうか。

## 2 英国のエージェント・H・P・シャストリの報告にみるアジア主義者の同床異夢

このように主にヨーロッパが目的地だった日本の船客にとって、日本語を流暢に話すハシム商会のスタッフは、長旅の退屈を吹き飛ばすだけの強烈な印象を残した。その一方で、1920年代に日本でアジア主義が隆盛し、英領インドの独立運動をめぐって日英の利害が衝突しはじめるにしたがって、日本人客を相手にしたハシム商会もまた政治的にとらえられるようになっていく。

こうした日英の緊張は1915年に始まる。独立運動のため暴力行為も辞さなかったラス・ビハリ・ボース(Rash Behari Bose, いわゆる中村屋のボース)は、英国の監視と管理が厳しくない日本郵船にのって、1915年に日本へと入国した。ボースはアジア主義者たちにかくまわれ、住所と名前を変えながら、活動を続け、英国のインド支配を批判し、日本の援助を訴えた。彼の活動は、大川周明や右翼団体の黒龍会からインド独立への関心とシンパシーを呼び、1916年にはタラクナート・ダス(Taraknath Das)などインド独立運動家が庇護と活動のために東京へとやってきた。英国政府は、彼ら独立運動家の国外

---

<sup>23</sup> Konrad Guenther, *Einführung in die Tropenwelt: Erlebnisse, Beobachtungen und Betrachtungen eines Naturforschers auf Ceylon* (Leipzig: Wilhelm Engelmann, 1911), p. 60.



追放を求めて日本政府に要求し続けたが、アジア主義者たちの政治的な発言力は強く、かなえられることがなかった。同 1916 年 10 月、不信感を強くした英国は、東京のインド人独立運動とアジア主義運動を監視し、かつ両者の関係を調査するため、H・P・Shastri というインド人エージェントを送り込む<sup>24</sup>。“Agent P”ことシャストリは早稲田大学にコネクションを作り、大学教授を詐称して、大川周明ほか黒龍会に巧みに取り入れることに成功する。インド人社会についても、タラクナート・ダスからの信頼を勝ち得てその助手として働き、彼らの私信や行動を逐一、英国政府に報告したのである<sup>25</sup>。

そんなふうに監視された一人が、親独派の帝国主義者でドイツ哲学者の鹿子木員信<sup>かのこぎかずのぶ</sup>である。シャストリのレポートによれば鹿子木は、タラクナート・ダスと親しく、アジア主義を熱狂的に信奉しており、「4月の初めにインドへ行くつもりだ」と述べていたという<sup>26</sup>。その言葉通り、1919年の春に鹿子木はインドへ渡り、建築史学者の関野貞とともに仏跡巡礼を行っている。しかし、関野と別れて後の3月に、インド独立運動を煽動した容疑でカルカッタから強制送還された。この事件は、日本がボースのような革命家の亡命を受け入れただけでなく、インド国内の独立運動にまで介入してきたとして英国政府に多大な衝撃を与えた<sup>27</sup>。鹿子木が帰国後に発表した記録をみると、サラット・チャンドラ・ダス(Sarat Chandra Das)の息子に手紙を託したところ、中身を通報されたことがわかる<sup>28</sup>。鹿子木は気づいていなかったようだが、彼が雇った「アルジャン」(Arjun)という老練な従者も情報提供者だった可能性が高い。「アルジャン」は、その後、仏跡を巡礼する関を案内しているが、関は、このインド人ガイドがこれまで鹿子木ほか著名な日本の旅行者を案内してきたことを知って驚いている<sup>29</sup>。ここで関が気づいていたのかどうかは不明ながら、鹿子木事件以降、日本の旅行者がインドで尾行されるのはほぼ公然の秘密となる。

---

<sup>24</sup> Richard J. Popplewell, *Intelligence and Imperial Defence: British Intelligence and the Defence of the Indian Empire, 1904-1924* (London: Frank Cass, 1995), p. 278.

<sup>25</sup> 詳しくは橋本順光「英国エージェントH・P・シャストリの諜報活動：東京・上海・ロンドンで活躍した「情報ブローカー」付・インドで押収された大川周明の英文書簡とその翻訳」、『大阪大学大学院文学研究科紀要』60(2020)を参照。

<sup>26</sup> “P’s Secret report”, 5 March 1918~~3~~, FO 371/3424, The National Archives (United Kingdom).

<sup>27</sup> Popplewell, *Intelligence and Imperial Defence: British Intelligence and the Defence of the Indian Empire, 1904-1924* (London: Frank Cass, 1995), p. 278.

<sup>28</sup> 詳しくは橋本順光「鹿子木員信のインド追放とその影響」、橋本順光編著『世紀転換期の日英における移動と衝突—諜報と教育を中心に』報告・論文集』(2013)を参照。以下のサイトでオープンアクセス可能(<http://hdl.handle.net/11094/27380>)。

<sup>29</sup> 關精拙『天竺行脚』(貝葉書院, 1922), p. 45.

それはインドにおいても知れ渡っていたようだ。例えば、とあるインドの法律家の海外旅行記に、「インドでは、旅行者であれ居住者であれ、日本人の行動は逐一が秘密警察に監視されており、駅を始め国内のいたるところでの質問攻めに彼らは嫌気がさし、うんざりしてしまう」と記している<sup>30</sup>。

こうしたインド亜大陸での緊張は、当時、英領インドの一部であったコロンボも無関係ではなかった。上陸する前から、船客リストが精査され、危険人物は尾行どころかそもそも上陸することを禁止された。1919年6月、同じ年の春に鹿子木事件あったことも手伝ってだろう、政治家の永井柳太郎は、ヴェルサイユ講和会議の帰路、船がコロンボに寄港した際に上陸禁止を言い渡されている。コロンボ港に入るや否やのうちに、インド政庁の役人が乗船してきて、永井は英国にとって有害なる人間であると考えられていると通達され、違反の場合はただちに逮捕されると念を押されたという。永井は、これまで英国のインド政策を批判し、特にインドの志士が日本に到来して、当時の大隈総理大臣に支援を求める際に便宜を図ったためブラックリストにのったのだろうと推測している<sup>31</sup>。これは永井が1943年の演説で回顧したことであるが、当時の英国の官憲に述べたことでもあるらしく、同じ内容が英国の公文書に記録されている<sup>32</sup>。

たしかにラス・ビハリ・ボースが1916年に来日した時の総理大臣は大隈であり、前述のシャストリのレポートでも永井は、「大隈伯の秘書、永井教授」として登場している。シャストリ自身が招待状を出し、資金も提供したダスの離日に際しての送別会に、永井は出席したのであった<sup>33</sup>。なおシャストリは、1918年に日本から上海に渡り、アジア主義団体や神智学協会の幹部を隠れ蓑として反英運動を監視しつつ、宥和と共存を強調する文化的なアジア主義を標榜することで運動の過激化を巧みに抑制した<sup>34</sup>。コロンボへの上

---

<sup>30</sup> Nolini M. Chatterje, *The World Civilisation of To-day; Or, The Far East and the New West* (Calcutta: Book Company, 1965), p.163.

<sup>31</sup> 大日本皇道奉賛会編『永井柳太郎氏興亜雄弁集』（竜吟社、1944）、pp.153-4.

<sup>32</sup> “Confidential Letter, from the General Officer Commanding the Troops, Straits Settlements to His Britannic Majesty’s Minister, Tokyo”, 28<sup>th</sup> June 1919, FO 262/1419, The National Archives (United Kingdom).

<sup>33</sup> “Report by Agent P.”, 13 August 1917, FO 371/3068, The National Archives (United Kingdom).

<sup>34</sup> 詳しくは Yorimitsu Hashimoto, “An Irish Theosophist’s Pan-Asianism or Fant-asia? James Cousins and Gurcharan Singh” in Hans Martin Krämer, Julian Strube (eds.), *Theosophy across Boundaries: Transcultural and Interdisciplinary Perspectives on a Modern Esoteric Movement* (Albany: State University of New York Press, 2020), p.366, n.40.

陸を拒否された永井が、シンガポールを経て上海に滞在した際、6月27日に「早稲田大学の元学生」が、永井を歓待したという諜報記録が英国公文書館に残されている。それによれば、永井は、「白人の専制打破」のためアジア主義の必要性を強調したという<sup>35</sup>。シャストリがしばしば寄稿したミラーズ・レビューには、永井が上海で日本の聴衆だけを念頭におき、反米的な演説を行ったことに批判的な無署名記事が掲載されており<sup>36</sup>、早稲田大学で旧知であった関係から、永井の講演会にシャストリが出席し、報告を提出した可能性は大いに考えられよう。

このように英国のエージェントだったシャストリが容易に日本のアジア主義者と緊密なネットワークを築くことができたのは、親米的な『ミラーズ・レビュー』に文化的なアジアの連帯を主張するなど、隠れ蓑を巧みに用いたことはもちろんだが、インド人はみな反英的ないしあるいはそれゆえに親日的とみなしがちという安易な思い込みが功を奏したことも大きかった。それは中国でも同じで、上海でシャストリは朝鮮独立運動の中心人物と接触することに成功し、臨時政府の「英文文書ノ訂正」を行う関係者にまでなっている<sup>37</sup>。さらに1924年には、上海亜細亜協会というアジア主義の団体に参加し、『大亜雑誌』を編集することで、より一層アジアの独立運動家や日本のアジア主義者に食い込むこととなる。黒龍会周辺の頭山満や大川周明、それにボースと旧知という人脈を使って孫文に2回面会しており、その際にはインド独立への関心について詳しく聞く機会を得ている<sup>38</sup>。こうしたシャストリの事例が示すように、故郷に錦を飾るためにヨーロッ

---

<sup>35</sup> “Japanese Activities: Anti British & American Movements in Far East”, FO 371/4244, 1919, The National Archives (United Kingdom).

<sup>36</sup> “Observations”, *Millard's Review*, July 19, 1919, pp. 253-4.

<sup>37</sup> 姜徳相『呂運亨評伝1 朝鮮三・一運動』（新幹社、2002）、p. 168 および p. 185 注 23 を参照。これは日本の密偵に基づく報告だが、シャストリは英国だけでなく、金銭もしくは攪乱のために日本の政府関係者にも随時、情報を提供していた。詳しくは橋本順光「英国エージェント H・P・シャストリの諜報活動—東京・上海・ロンドンで活躍した「情報ブローカー」『大阪大学大学院文学研究科紀要』60(2020)、pp. 87-8 を参照。

<sup>38</sup> 後年、英国に移住したシャストリは、東京の書店で孫文に会い、彼の勧めで上海に渡ってヨガを教えるようになったと、全く事実と異なる半生を周囲に語った。橋本順光「英国エージェント H・P・シャストリの諜報活動—東京・上海・ロンドンで活躍した「情報ブローカー」」、p. 80 を参照。シャストリ自身が孫文の追悼記事で記すように、彼が孫文に会うことができたのは病床についてからであろう。おそらくは1924年以降かと思われる。詳細は H. P. Shastri, “My First Meeting with Dr. Sun Yat-sen”, *The China Weekly Review*, Mar 21, 1925, p. 77 を参照。このときの面談に基づくと思われる “Dr. Sun Yat Sen”, *Weekly Report of the Director, Central Intelligence, Dated Simla, the 21st September 1918*, pp. 3-4, IOR/NEG/10514 とい

パへ渡る日本郵船の比較的裕福な乗客の多くもまた、苦境に立つ親日的なインドという幻想を抱きがちだった。ハシーム商会は、そんな当時の洋行客が抱いていた思い込みやアジア主義的な心情を否応なく刺激したのである。

### 3 アジア主義者ハシームの反英活動？－「日本は我々の兄弟」

それは、マイノリティとしてブラジルで一生を過ごす決意でコロンボに立ち寄った大阪商船の移民にとっても例外ではなかった。たしかに日本郵船で洋行する船客に比べれば、およそ金銭に余裕はなかったはずであり、彼らはハシーム商会にとって上客ではなかったかもしれない。ただ、そうした移民客を念頭においてだろう、ハシーム商会は宝石だけでなく、手広く雑貨も商いしていた。たとえ接客の一環だとしても、丁重に客として扱ってくれるハシーム商会に、見知らぬ土地への慣れない道中で心細かった移民たちが感銘を受けたであろうことは想像に難くない<sup>39</sup>。

例えば1930年に、移民の監督官としてコロンボに寄港した石川達三は、宝石商の店に、日本の軍人や貴族が立ち寄り、その写真が掲示されていることに驚いている。石川は、大胆にも店の番頭に、ガンジーをどう思うか聞いたという。彼は流暢な日本語で「人々が統一されず、ばらばらだから、ガンジーは偉大だけれども、革命は成功しないだろう」、そのため「私は経済で実権を握るのが得策だと思う」と語り、ただし、日本が軍事的な援助をしてくれれば「インドは白人に負けることない」と付け足したという。さらに「日本は我々の兄弟であり、我々の独立は日本の力にたよるしか方法がない」と念を押したというのである<sup>40</sup>。

ハシームでは宝石を買う際に日本円でも、日本に帰ってからの送金でも問題ないと聞いて、石川は親日ぶりに感心してもいる。この時の体験を元に、石川は大阪商船でブラジルへ移民する群像を『蒼氓』(1939)で描いて話題となった。この小説でも、ハシーム商会は「英語で話しかけられても日本語で対応する」親日主義の店として描かれ、その歓待に「気をよくした一行は郊外の寺を見物しに出かけて見た」とある<sup>41</sup>。移民たちが実際

---

う諜報記録が英国に残されている。追悼記事との比較は、本稿の企図から外れるので別稿を用意しなければならないが、内容が一部重複しており、大川とラス・ビハリ・ボースの双方を知っている上海在住のインド人ということから、この報告者はシャストリである可能性が極めて高い。なお、本報告によれば孫文は大川周明をさして評価していなかったという。

<sup>39</sup> 人種をめぐる対立が激しかった当時の事情を考慮する必要があるが、ケープタウンの雑貨商についてはこうした記述はなかなか見られない。

<sup>40</sup> 石川達三『最近南米往来』(昭文閣書房, 1931), pp. 58-9.

<sup>41</sup> 石川達三『蒼氓』(秋田魁新報社, 2014), p. 174.

にこのように物見遊山を楽しんだのかどうかは、調査の余地が残されているが、ハシームは木彫りの象など手ごろな値段の土産物や雑貨も扱っていたので、大阪商船の船客にもまた熱心に商売に励んだであろうことはまず間違いあるまい。



図9 1934年に来日したM・J・ハシームへのインタビュー記事<sup>42</sup>

図10 ハシーム商会の広告(図5)と見開きで隣頁に掲載されたリプトン社の広告<sup>43</sup>

このように手広く日本の船客をとりこんだハシームの商法は、多分に経済的な理由が第一にあると考えられる。しかし、それとは裏腹に、1930年代の日本の船客たちは、ハシーム商会をあたかもアジア主義的な反英組織であるかのようにみなすことが増えていった。1934年の夏、東郷平八郎の死去に伴い、父に代わって献花する目的でM・J・ハシームが来日したことも拍車をかけたであろう。敬愛する日本を一度は見てみたいという一心で来日したとは、いくつかのインタビュー取材記事が記すところであるが(図9)、目的は観光ではなかった可能性が高い<sup>44</sup>。1932年2月にハシーム商会は、後払いすると約束しながら不履行の客について名前と住所を日本政府に送り、返還の督促を代行

<sup>42</sup> 細川辰彦「インドの大宝石商ハシーム氏に宝石の話を訊く」『キング』1934年12月号, pp.236-7.

<sup>43</sup> T. Kawata (ed.), *Glimpses of the East: Nippon Yusen Kaisha's Official Guide, 9th Annual Issue 1926/1927* (Tokyo: Nippon Yusen Kaisha, 1927), Burman, Colombo Section, p.25.

<sup>44</sup> 遺族が所有する新聞記事のインタビュー(掲載紙は不明ながらおそらく来日時のもの)には、「仰ぎ見る日本よ 全印の眼はここに」や「憧れの地のものみな感激と 美談の主ハシム君熱情を語る」といった文字が踊っている。

するよう依頼している<sup>45</sup>。したがって、M・J・ハシームの来日は、東郷への献花とともに負債の後始末という側面もあったとも考えられるからである。

しかし、こうした負債の取り立てはまったく表に出ることはなかった。日本語から離れ、よりナショナリスティックになった船客には、「日本は我々の兄弟であり、我々の独立は日本の力にたよるしか方法がない」といった日本人客へのリップサービスを含んだハシーム商会のスタッフたちの言動は、日本にとって都合の良いアジア主義者の理解者と解釈され、その代表として表象されるようになっていったのである。

その最たる例が、門外不出のアッサム・ティーの種をハシーム商会のスタッフが盗み出すのを手助けしたという風説であろう。これはブラジルで茶の移入に執念を燃やしていた岡本寅蔵が語ったという記録が残っている<sup>46</sup>。岡本は1934年に日本へ一時帰国した際、コロンボのリプトンの紅茶プランテーションから、紅茶の種を手に入れたいとハシーム商会に相談したという(図10)。厳重に警戒されていると断られるが、工場見学なら可能というので車で向かったところ、帰りの車にハンカチに包んだ種がそっと置いてあり、岡本は興奮に震えたという。岡本は、その種をパンの中にくりぬいて詰め、さらにハシーム商会の社員に持たせることで、無事に船に運び込むことに成功したというのである。こうした入手の経緯の真偽はともかくとして、岡本は苦心の末に、ブラジルで紅茶の栽培を成功させて、ブラジルの紅茶王として財を成したのだった。

この岡本の武勇伝はその後、長く伝えられた。北杜夫は、ブラジル移民の歴史をパノラマのように描いた小説『輝ける碧い空の下で』(1986)のなかで、この逸話をさらにドラマティックに描いている。それによれば岡本は、巨大なインド系コミュニティがあった東アフリカ沖の英領ザンジバル港(大阪商船直航便は1926年に開通)で、インドの宝石商から宝石を買ったのがきっかけだったという。商談後、紅茶を共にした際、岡本が紅茶をブラジルで栽培しようとしているというのを聞いたその宝石商が、ハシーム商会を紹介したことになっている。インド人の宝石商がそのように岡本を手助けするのも、アッサム茶は「インドに育った」のに、「英国人が独占している現状を苦々しく思っているから」という<sup>47</sup>。こうして日の丸を着けたハシーム商会の社員は独自に入手した種を中国の饅頭に隠し、それを自分の妻に岡本の乗る船の甲板まで売りに行かせるから、それをそしらぬ顔で買いなさいとまで指示している。冒頭で触れたファワトの絵のような、コロンボ港で甲板に乗り込んでくる商売熱心な物売りというステレオタイプをいわば逆用したわけである。

---

<sup>45</sup> 橋本順光「インドの代名詞コロンボデッキパセンジャーとハシーム商会」, 橋本順光・鈴木禎宏編著『欧州航路の文化誌—寄港地を読み解く』(青弓社, 2017), p. 132.

<sup>46</sup> 角田房子『ブラジル日系人』(潮出版社, 1967), pp. 59-61.

<sup>47</sup> 北杜夫『輝ける碧き空の下で』第2部(新潮社, 1986), p. 66.

前述のように北杜夫は1958年にハシム商会に立ち寄っているが、多くを語っておらず、その時の経験が約30年後の小説にどこまで生かされたのかは憶測でしか知りえない。ただ前年の岸信介首相の東南アジア歴訪がそうであったように、戦争の記憶がまだ生々しく、破壊のあとがいたるところに残っていた当時のアジア各地の港を訪れた後に、親しげに日本語で話しかけて商売にいそしむハシム商会の人々が、北の印象に残ったことは想像に難くない。北もまた1930年代に訪れた石川達三を思わせるような、過剰なまでの思い込みともいえる筆致で、彼らを描いているのである。北の『輝ける碧い空の下で』(pp. 68-9)で、ハシム商会の店員は岡本に「イギリス人に比べれば、日本人はみんなインド人の味方です」と述べる場面などその最たるものだろう。こういった小説による誇張も手伝ってか、「今日のブラジルで栽培されているアッサム茶の苗木は、1935年に岡本がインドから困難に屈することなく密輸に成功した種に端を発している」と今日でも英語圏でまことしやかに語り継がれている<sup>48</sup>。

この伝説の成立と流通を考える際、示唆に富むのは角田が書き添えた同様の逸話であろう。角田によれば、同じ1930年代、ジュート(黄麻)がインドから、胡椒がシンガポールから、それぞれ日本人移民によってブラジルに運ばれ、ついには輸出産業にまで発展し、ブラジルのホスト社会から深く感謝されたというのである。19世紀から20世紀初めにかけてブラジルでは、ゴム産業が全盛期を迎えたが、イギリス人にゴムノキを盗まれ、英領マラヤなどに植えられたことで産業が廃れてしまう。そこへ日本人がイギリスの植民地から、宝の生る木を持ち込んで新しい産業を興したというのである<sup>49</sup>。

たしかに、1876年にヘンリー・ウィッカム(Henry Wickham)が虚偽申告することでブラジルからゴムノキの種を持ち出したことは、1930年代に英語圏の一般書にも書かれるほどよく知れ渡っていた<sup>50</sup>。結果として、生活に欠かせないゴムが安価で世界中に広まったことは強調しつつも、それがウィッカムの「密輸」という冒険的な行為だったという認識はあったのである<sup>51</sup>。こうしたウィッカムの大胆な冒険の評価は、敵対していたナチス政権下のドイツにおいて彼を主人公にした映画「ゴム」(Kautschuk, 1938)が製作されたことからもうかがえる<sup>52</sup>。岡本らが見たかどうかは不明ではあるが、ウィッカムがゴムノ

---

<sup>48</sup> Nick Hall, *The Tea Industry* (Cambridge: Woodhead Publishing, 2000), p. 46.

<sup>49</sup> 角田房子『ブラジル日系人』(潮出版社, 1967), p. 155, p. 170.

<sup>50</sup> Harvey S. Firestone, Jr, *The Romance and Drama of the Rubber Industry* (Akron, Ohio: Firestone Tire and Rubber Co., 1932), p. 170.

<sup>51</sup> それは今でも同じであることは Joe Jackson, *The Thief at the End of the World: Rubber, Power and the Seeds of Empire* (New York: Viking, 2008)を参照。

<sup>52</sup> 詳しくは Mary-Elizabeth O'Brien, *Nazi Cinema as Enchantment: The Politics of Entertainment in the Third Reich* (Rochester, N.Y.: Camden House, 2006), pp. 66-78 を参

キを密輸するこの映画の話型は、岡本の武勇譚とほぼ同じといってよい。この映画でウィッカムは、ブラジルの貴族的な支配者と距離を置き（図1 1）、現地の協力者から信頼を勝ち得ることで密林の奥深くでゴムノキを苦勞の末に入手し（図1 2）、甲板での物売りに扮して仲間と連絡を取り合っているのである（図1 3）。



図1 1 1938年のドイツ映画『ゴム』の一場面 ブラジルのプランテーション経営者に不敵に微笑むウィッカム。

図1 2 同映画より、現地の労働者で協力者のホセに助けられて微笑むウィッカム

図1 3 同映画より、物売りに扮して英国船の甲板に上がろうとするウィッカム

映画の「ゴム」は同時代の日本では上映されなかったが、南洋の一大ゴム産業がウィッカムの「密輸」から叢生した事績については、1920年代以降の日本でも一般によく知られていた。早くも1908年に台湾へゴムノキを移植するという計画があり、移植は頓挫したもの<sup>53</sup>、1920年代には、例えば南洋協会台湾支部から刊行された『熱帯有用植物誌』（1926）や台湾総督府発行の『台湾時報』などでゴム産業の説明に際してウィッカムの重要性は特筆されており<sup>54</sup>、岡本寅蔵が耳にしているのも不思議ではない。少なくとも角田が『アマゾンの歌』（1966）で描いたようなアマゾン河流域の移植を主導した南米拓殖会

---

照。独占や専制を覆すウィッカムは英国人ながら当局から見ても望ましいと検閲を通過したが、翌1939年の開戦により敵国人を好意的に描いているという理由で、ドイツでは商業上映を取り下げられている。

<sup>53</sup> 工藤弥九郎『熱帯植物写真集』第5巻（明文堂，1934），17（頁記載なし）「パラゴむのき」によれば、ウィッカムの逸話に触れた後、1904年に台湾に初めて持ち込まれ、1908年に台湾林業試験支所で栽培試験に着手したという。

<sup>54</sup> 金平亮三『熱帯有用植物誌』（南洋協会台湾支部，1926）pp. 432-3，澤出みわ訳「護謨」『台湾時報』1932年3月号を参照。後者は、Howard Wolf, “Rubber, The Industry That Never Grew Up”, *The Forum*, November 1931の抄訳である。ほかにも台北帝国大学理農学部発行の『熱帯農学会誌』1(1) (1929)にある野田幸猪「馬來、セイロン及爪哇の熱帯農業に就て」p. 109によれば、コロンボ北東のHeueratgodaにある1876年設立の旧植物園では「Wickham氏がアマゾンからとり寄せた」ゴムノキが今もなお生育しているという。



社で知られていなかったとは考えにくい<sup>55</sup>。

たしかに英国が中国やブラジルから種を盗み出してプランテーション産業を作り上げたのに対抗して、その英国の植民地から種を「密輸」して、ブラジルに新たな産業を興したというのは、捲土重来ともいうべき痛快な物語である。これが伝説としてブラジル社会に流通していることも納得できよう。ただ、農業においては種の取得だけでなく、環境と育成も同じくらい重要であることは看過できない<sup>56</sup>。たしかに良質な種は不可欠ではあるが、しかるべき環境の整備は欠かせず、特にブラジルのような土地で、移入種を採算がとれる品質で生産することは至難の業だった。事実、ジュート、黒胡椒、それにアッサム・ティーがブラジルに根付き、生産されるようになるまで、日系移民たちがひとかたならぬ苦勞と努力を続けたことはよく知られている<sup>57</sup>。北杜夫の『輝ける碧き空の下で』でも、ジュートの栽培については、その種の入手よりも、それを商品になるまで育て上げる困難と根気が重点的に描写されているとおりである。そもそも、ことジュートについていえば、すでに 1920 年代においてインドからブラジルへと移入が試みられていた。

---

<sup>55</sup> 対照的に、英国のロバート・フォーチュン(Robert Fortune)が東インド会社に依頼され、1848年に中国に赴き、チャノキを中国から持ち出した有名な逸話は、当時、あまり言及されることがなかった。例えばアリス・M・コーツ、遠山茂樹訳『プラントハンター東洋を駆けるー日本と中国に植物を求めて』(八坂書房, 2007), p. 168 は、アッサムで見つかったチャノキを重視し、「フォーチュンが持ち込んだ中国茶も、結局インド国産のアッサム茶に取って代わられた」としている。一方、訳者の遠山茂樹の『歴史の中の植物ー花と樹木のヨーロッパ史』(八坂書房, 2019), p. 415 は、アッサム自生のチャノキの味は劣悪で、フォーチュンの持ち込んだチャノキがアッサムでの茶産業の主力になったとしている。

<sup>56</sup> 例えば、ブラジルのゴム産業について古典的な研究を残したディーンも強調したように、植物の移植では、生物的ないし社会的要因よりも環境要因が事態を左右することがよく見られる。Warren Dean, *Brazil and the Struggle for Rubber: A Study in Environmental History* (Cambridge: Cambridge University Press, 1987)によれば、東南アジアでゴム産業が成長したのに対し、アメリカの巨大企業はじめ、ブラジルも官民挙げて国内のゴム産業を振興させようとして失敗したのは、ブラジル社会の問題というより、致命的な病害のためだったという。

<sup>57</sup> 例えば角田房子の『アマゾンの歌ー日本人の記録』(毎日新聞社, 1966)は、「欧米開拓者のすべてが敗退した苛酷な自然環境の中で、日本人だけが勝利をおさめ」(p. 261)、胡椒とジュートの栽培に成功したことを特記している。「日本人の耕地の胡椒園は、間隔が正しく、定規で線を引いたように整然と並んでいる」のに対し、「ブラジル人の耕地となると、ヨロヨロと線はまがり、つるや葉にも、日本人が栽培したものほどの勢いがない」と対照させているところからもうかがえるように(p. 244)、異国から持ち込まれた胡椒が整然と植えられて管理され、一大産業となった経緯を、日本人の移植と二重写しにしている。

このことは政府間で合意があり、種は英領インドから正式に購入されていたのである<sup>58</sup>。したがってアッサム・ティーも種の入手よりも、同時代のケニアやインドネシアで移入と栽培が進行していたように、しかるべきコストで生産できるようにすることこそが困難であり重要であったと考えられる。

政治的な問題も無視できまい。日英同盟が1921年に廃止が決定されて日本の拡大政策が露骨になり、1931年に満州で日本の傀儡国家が成立したのと前後して、ブラジルでは権威主義体制が成立している。1930年に、ジェトゥリオ・ヴァルガス(Getúlio Vargas)がクーデターを起こして大統領に就任し、熱狂的なナショナリズムが「ネイティブのブラジル人」に広がったという。日本は満洲へ移民を送り込んでから軍隊を派遣したのだから、ブラジルもいつか日本に植民地化されるかもしれないと議会は紛糾し、日系移民をあたかも先遣隊のようにみなす風潮まで生まれ、対抗手段として「同化強制プログラム」が採用されている<sup>59</sup>。このような1930年代の日系移民に対する風当たりの強さを考えれば、彼らが英国の商業帝国の目をかいくぐって種を奪取し、ブラジルに貢献したという物語が、たとえ根拠薄弱であったとしても熱烈に支持されたのは当然だろう。

先に述べたように、1930年代、ハシームの息子は東郷の墓に参拝した。たとえ取り立てが目的であったにしても、彼は親日印度人の広告塔として各種雑誌などで報道された。英国の植民地であるインドの手助けにより、英国が上位にたつ市場に参入して対抗勢力となるという物語は、1930年代のブラジルにとっても日本にとっても双方のナショナリズムを刺激したはずである。先述のとおりコロomboの名産で、ハシーム商会が売り物にしたムーンストーンは、植民地からの搾取とその心理的な代償をいち早く描いたウィルキー・コリンズ(Wilkie Collins)の小説の題名でもある。この『ムーンストーン』(*The Moonstone*, 1868)では、インドの仏像から盗みだされた宝石が、奪った者にふりかかるという呪いを裏書きするように、インド人奇術師に扮装した3人のヒンドゥーのブラフマンによって取り戻される。ハシームの手助けにより紅茶の種を入手して、かつてブラジルから盗まれたゴムノキの恨みを晴らす岡本の物語は、19世紀初の反植民地主義の娯楽小説ともいえる『ムーンストーン』の物語と実のところ共通点が多い。直接影響したとは考えられないが、収奪された者がそれを冒険の後に取り返す『ムーンストーン』の物語は、19世紀末以降、日本を含め各国で数多の冒険娯楽小説の原型となった。ドイツ映画『ゴム』はまさしくその一例となっており、岡本はそんな神話を期せずして反復し

---

<sup>58</sup> Antoinette M. G. A. WinklerPrins, “Jute Cultivation in the Lower Amazon, 1940-1990: An Ethnographic Account from Santarém, Pará, Brazil”, *Journal of Historical Geography* 32(2006), p. 824.

<sup>59</sup> Daniela De Carvalho, *Migrants and identity in Japan and Brazil: The Nikkeijin*. (London: Routledge, 2014), p. 18.

たといえるだろう。少なくとも岡本は、小説のブラフマンのように、その奪取の物語により、ブラジル社会のなかでひとかどの人物として認知されるようになったのである。

#### 4 岸信介の猫目石事件とハシーム商会への余波

戦後、肩身が狭い思いでコロンボに降り立った日本の船客も、これまで同様にハシーム商会によって道中とは異なる解放感を味わったと考えられる。敗戦まもない 1948 年、オランダ汽船会社紹介の英国船で、再びフランスに向かった画家の荻須高德は、「上海、香港、マニラ、セブ、シンガポールと、まるで戦跡巡礼のよう」で「はらはらさせられた」と、旅の間、終始、気の緩むことも休まることもなかったことを示唆している。それがフィリピン、マレーをまわってコロンボへ着くと、なにせ「はじめて久々に見る戦禍を被っていない地なのである」と解放感たっぷりに、筆が躍り始める。「街を歩く身も気楽なら、見るほうの目も何の変わりも」なく、「街の昔ながらの宝石屋では、つい日本語の片言で呼びかけるものも」いて、「相変わらずの象の置物、亀甲のシガレットケース、ムーンストーン的首飾りなどと、並んだ棚には、この前、八年前に通った時と同じ埃がつもっているような気さえして懐かしかった」というのである。ハシーム商会とは書かれていないが、あまり戦禍を感じさせないコロンボとその宝石商に、ほかにも日本からの船客が緊張の続いた旅から一時的に解放感を抱いたであろうことは想像に難くない<sup>60</sup>。

改進黨所属の衆議院議員だった宮腰喜助の秘書中尾和夫も、1952 年にコロンボを訪れて同じような感想を残している。ソヴィエト連邦を経由して北京を訪問し、日中民間貿易協定に調印して物議をかもすことになる旅程の途中でのことである。1952 年 4 月 17 日に、中尾らは「波止場前の親日宝石商ハシム氏を訪れ」、「明治時代よりの日本からの訪問者の名刺を所蔵しているのに」驚き、「ハシム氏より記念として、宝石「猫の目」を贈られ」と記している。さらに中尾は、街を歩いていると「親しげに寄って来て、話しかけて来る」親日感情の高さに感激し、英国の戦闘機を撃墜し、自爆した日本の飛行兵の墓を見て、「日本人は偉いと今でもセイロン人は尊敬しているとのことである」と記している<sup>61</sup>。ハシーム商会の示す流暢な日本語と名刺の束に感化され、リップサービスの可能性や権力関係も忘れて、都合良く共感を過大評価するのは、戦前の例えば石川達三と全く変わるところがないとさえいえるだろう。

興味深いのは、ここで中尾がハシーム商会から猫目石を贈られていることだろう。というのも、この 5 年後、岸信介首相がアジアを歴訪した際、高価な猫目石を購入したとして、長く紙上を騒がせることになるからである。ただし、この「宝石事件」はコロンボ

<sup>60</sup> 荻須高德『パリ画信』（毎日新聞社、1951）、p. 10 および p. 22.

<sup>61</sup> 『日中友好議員連盟関係資料 中尾和夫文書 日記・会談記録』（現代史料出版、2002）、p. 11.

ではなくシンガポールでのこととされている。岸自身の回顧によれば、シンガポール滞在中に宝石店に立ち寄ったが、何も買わずに出てきたところを、「APの記者が数百万円も宝石を買ったように打電し、ごていねいにも宝石商の談話までとって送った」のが事の発端だという。金額もさることながら、重要なのは、この報道により、外貨や関税の関係でこれらの宝石を国内に持ち込めば現地以上の金額になることがあると、周知されたことだろう。愛知揆一官房長官が火消しのために嫌疑は「事実無根」としつつ、ヒスイなどを「約四万円買った」だけと釈明した記事も出たが<sup>62</sup>、岸は何も買っていないと回顧しており、虚偽の報道をした咎でAPの首脳陣はその記者を解雇したと述べている<sup>63</sup>。



図14 ハシム商会でのM・J・ハシム（左）と岸信介（中央）（遺族蔵）

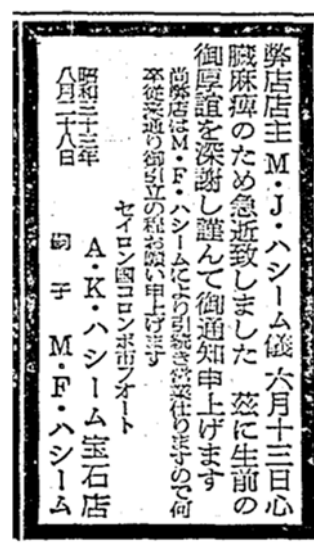


図15 1958年8月28日付『朝日新聞』東京版朝刊掲載のM・J・ハシムの訃報広告。

騒動の真相はともかく、岸はハシム商会を訪れており、1957年5月30日という日付が記された記念写真がハシムの遺族に残されている（図14）。左に立つA・K・ハシムの息子M・J・ハシムが猫目石を売ったか贈ったかについては、今のところ何も手掛かりは残されていない。興味深いことに、騒動から十年後の1967年、大宅壮一は岸が買ったという猫目石に触れて、その主産地であるコロンボには「日本人を主たる顧客としている宝石店」があり、「明治以降、ここで宝石を買った維新の“元勳”以下、日本の各界名士の写真を展示し、サイン帳を出して見せる」とハシム商会を紹介している。大

<sup>62</sup> 1957年11月29日付『朝日新聞』朝刊を参照。

<sup>63</sup> 岸信介『岸信介回顧録—保守合同と安保改定』（廣濟堂出版、1983）、pp. 387-8。同じことは、岸信介『岸信介の回想』（文藝春秋、1981）、p. 259でも強調されており、「口頭だけでも私にご迷惑かけた、処分したと言ってきたことがありますよ」と述べている。

宅はこうして買われた宝石は、鹿鳴館に代表される虚栄の消費文化を象徴していると要約する一方、最近の日本では、これまでとは異なり、税金対策や投資を目的として宝石が買い漁られることに注意を喚起したのだった<sup>64</sup>。その点で岸の「宝石事件」の重要性は、真相よりも、猫目石の投機的な価値を高めたことかもしれない。実際、「ネコの目のように光るキャッツ・アイは、三十二年、東南アジア訪問の岸前首相が買ったとか買わなかったとかで話題を呼んでから日本からふとところに札束をねじ込んだ宝石商がセイロンに殺到した」という、1963年7月18日付『毎日新聞』夕刊の報道があるほどである。ハシーム商会が、こうした事態を見込んで贈ったわけではないだろうが、少なくとも中尾和夫に贈った以上の見返りを手にしたことは間違いないことだろう。岸を迎え、中尾和夫に猫目石を贈ったM・J・ハシームは1958年6月13日に急逝するので(図15)、こうした投機にも似た宝石熱を見ることはなかったと思いが、ハシーム商会は、その後もM・F・ハシームによって内戦勃発まで順調に営業を続けたのであった。

## 終わりに

このようにコロomboのハシーム商会は、インド亜大陸以上にインドを表象する際に決定的な役割を果たした。日本語と日本円が使えて、後払いでもかまわないというハシームの商法は実利に基づく戦略だったが、日本の船客たちは、ハシームの親日的な態度を反英的でアジア主義的な態度と過剰評価する傾向があった。それゆえインドの独立運動をめぐって日本と英国の利害が対立するなか、ハシームは日英の両政府から要注意とみなされないよう、巧みに立ち回ったと考えられる。およそ日本国内では宝石とは無縁だったような無骨で堅物な日本の帝国軍人たちが必ず立ち寄り、土産物を買うか、タクシーを雇い、気軽に写真撮影に応じているのは、確かになにかしらの情報を得るためだったと疑われてもおかしくはないが、少なくとも日英の公式記録にそうした諜報に関わっていたという文書は残っていない。ハシーム商会に反英運動とアジア主義に加担するもう一つの横顔があるとみなすのは、もっぱら日本側の想像の産物であった。特に南米では、日系移民が日本の軍国主義ゆえに警戒されたため、英国がゴムノキを奪取したように、日本が英国の目を盗んでインドから紅茶の種をハシームの助力により密輸したという冒険的な伝説が形成され、流通したと考えられる。

親日だけでないもう一つの側面は、商機を逃さずバランス感覚に優れた実業家という横顔だろう。後払いの負債をただ取り立てたり、不正を訴えたりするのではなく、軍神東郷への献花を来日の目的と述べ、親日的な宝石商として、今後立ち寄るかもしれない日本の潜在的な船客に抜け目なく宣伝を果たしたとすれば、特筆すべき商才であろう。

---

<sup>64</sup> 大宅壮一「宝石という名の麻薬」、『大宅壮一全集』8巻(蒼洋社, 1980), pp. 251-2.

宝石だけでなく旅行業者として規模を拡大し、多くの日本人客に愛され記憶された信用をもって知られるハシームのそうした側面は、しかし、資料がほとんど残されていないため、残念ながら断片的にしか知ることができない。

戦後もコロomboの名物となったハシーム商会は、1983年、内戦による火事により創業91年で幕を閉じ、多くの資料はそのときに失われた。ちょうどその1983年、人気の推理作家だった平岩弓枝がコロomboを訪れている。しかし、内戦のため当初予定していた取材はほとんどかなわず、コロomboの宝石店が登場する小説『青の伝説』(1985)は、当地の滞在を十分に生かせることなくわずかな言及にとどまり、ブルーサファイアの偽造をめぐる「カシム」は登場してもハシームが登場することはなかった<sup>65</sup>。『青の伝説』は話題作となり、同1985年にドラマ化されることになったが、制作時でもコロomboは依然として危険な状態だったため、撮影は断念され、それにともなってメインのロケ地もシチリアへと変更されたという<sup>66</sup>。こうしてハシーム商会は、映像に残ることもなく内戦で焼失し、ハシーム自身の肉声をたどることはほぼ不可能となってしまふ。

こうした火種は今も完全に払拭できてはいないものの、コロomboが地政学的にも物流の点でも要衝の土地であることに変わりはない。そもそもハシーム商会が建っていたフォート地区は、「城砦」という名が示す通り、最初はポルトガル、次にオランダ東インド会社が建設した砦にちなんでおり、その後、英国によって港湾経済の中核として整備された街である。目下、このフォート地区に隣接する形で、新規港湾事業が立案され、海を埋め立てた巨大な経済地区となるはずのポート・シティが建設されている。完成すれば、これまでのコロomboの都市全体を旧市街にしてしまうほどの巨大な規模となるため、中

---

<sup>65</sup> たしかに戦後になると、ハシーム商会以外にも日本語を操る宝石商が存在感を示すようになっていた。1963年7月18日付『毎日新聞』夕刊の「買いあさる日本人 宝石の国セイロン」によれば、「日本語ペラペラの息子が応対にでてくるなどの親日宝石商」がいて、「アリー商会では客の九割までが日本人だと」ある。ただアリー商会については日本側の記録は少なく、歴史と実績から考えて依然として日本の船客にとってはハシームがコロomboを代表する宝石商だったと考えられる。両者はヨーク・ストリートを挟んで競合しており、1956年だとアリー商会の方が雑貨が安かったとは『本多勝一集 第四巻』(朝日新聞社、1998)、p.214にある。なおアリー商会は、*Ceylon: the Pearl of the Indian Ocean* (Colombo, Ceylon Publicity Committee, 1935)、p.98にある“M. Ali Bros.”のことであろう。ほかにも木下恵介監督の東宝映画『スリランカの愛と別れ』(1976)に出演することになる高峰秀子は、1958年にコロomboを訪れ、知人に頼まれたブルーサファイアを港に近い宝石店で購入し、息子のアリー少年と親しくなっている。詳しくは高峰秀子『おいしい人間』(潮出版社、1992)、p.214を参照。

<sup>66</sup> 平岩弓枝『平岩弓枝自選長編全集』15(文藝春秋、1989)の月報p.2を参照。

国の一帯一路構想との関連からその行方がつとに世界中で注目されている<sup>67</sup>。そんなコロ  
ンボに、もっぱら日本からの船客を対象にした宝石店兼旅行業者が長く港の表玄関で店  
を構えていたことは、ポルトガルやオランダとの関わりのように、いずれ歴史の一エピ  
ソードとしてしか顧みられなくなるかもしれない。とはいえ、このハシーム商会が近代  
日本のインド表象に影響を与えた経緯は、群盲象をなでるという慣用句通り、洋行客や  
移民たちがどのように世界を見ていたかという好例を示すものだろう。その思い込みを  
子細にみてみれば、日本のインド像やアジア主義がいかにセイロンやインドの人々と同  
床異夢であったことかを示している。そうした幻想をむやみに否定することも煽ること  
もなく、着実に商売を展開していったハシーム商会の姿は、日本のアジア主義を考える  
点で特筆してよい一例といえるだろう。

〈付記〉本研究は公益財団法人 JFE21 世紀財団 2019 年度「アジア歴史研究助成」に  
よる成果の一部であり、関係者各位および A・K・ハシームの御遺族である Riyaz Hasheem、  
Asif Fuard の両氏に深くお礼申し上げたい。

---

<sup>67</sup> 例えば 2 Aug 2018 07.15 BST に *The Guardian* に掲載の Michael Safi, “Sri Lanka’s ‘New  
Dubai’: Will Chinese-built City Suck the Life out of Colombo?”,  
([https://www.theguardian.com/cities/2018/aug/02/sri-lanka-new-dubai-chinese-city-  
colombo](https://www.theguardian.com/cities/2018/aug/02/sri-lanka-new-dubai-chinese-city-colombo)) や 17 January 2022 掲載の BBC News, Anbarasan Ethirajan, “Colombo Port City: A  
New Dubai or a Chinese Enclave?” (<https://www.bbc.com/news/world-asia-59993386>) を参照。